

## 謙斎鄭敬の真景山水画に描かれたソウルの眺望景観について

A Study on the Scenery of Seoul Landscapes by Kyomjae Chongson

99M43303 徐南姫 指導教官 斎藤 潮

## SYNOPSIS

This research is a study of how people in the Yi Dynasty looked at various aspects of the scenery of the city of Seoul, Korea. This was based on the paintings of Kyomjae Chongson, a famous artist of the Chosun(Yi) period

Kyomjae used a unique Korean style of painting called Jin Kyoung scenery. He used this style to characterize the uniqueness of his subject and to express his artistic feelings. He was able to capture the characteristics of his subject to show their unique identity. This research was focused on Kyomjae's painted descriptions of early Seoul and how he was influenced by feng shui.

In conclusion, Kyomjae Chongson had described Seoul in a way that we can now look at from a modern day perspective. In other words, we will now view modern day Seoul from the same viewpoint that Kyomjae looked at from more than 300 years ago.

## I. はじめに

## 1-1 研究の背景及び目的

ソウルは、優れた自然環境や 600 年以上の歴史環境を持つ古都である。また、その中心部に山と河川を持つという形態を有しており、美しく個性のある都市景観を形成することのできる潜在力が豊かな都市である。

しかし、朝鮮戦争後、経済成長が政策の中心を占めるようになって、物的・量的成長が推進された結果、様々な環境的問題が発生した。このような状況から多様な側面から環境の質を保存し、改善していく努力が始められている。特にソウルの代表的なランドマークである南山や漢江などの自然環境を保存しようとする動きが目立っているが、視対象としてのランドマークに対し、視点の指定の根拠は曖昧である。

本論文では、韓国で実景描写を事実上、創始したことで、知られる朝鮮時代の画家、謙斎鄭敬(以下謙斎と呼ぶ)の真景山水画を採り上げ、どのような地形が重視され、どのような視点が選択されて画に取り込まれているのか、そこから当時の人々はソウルの景観をどのような観点から眺めていたのかを分析してソウルの眺望景観を再照明する。

## 1-2 既往研究

眺望景観を対象としたものについては、景観ディスプレイ論<sup>i</sup>、構図論<sup>ii</sup>、形姿論<sup>iii</sup>な研究がある。形姿論的研究には絵画などの表象を用いて実際の山岳の形姿とその認識のされ方との関係について考察した研究<sup>iv</sup>や、実際の眺望点からの眺望内容を詳しく分析していくことで、眺望のもつ役割にまで踏み込んだ研究<sup>v</sup>がある。

謙斎と真景山水画を対象としたものについては、美術分野に多くの研究があり、また、造景<sup>vi</sup>や都市景観的<sup>vii</sup>な立場からの研究がある。特に朝鮮時代当時のソウルの都市景観を復元する手がかりとして、謙斎の真景山水画を位置付けている研究<sup>viii, ix</sup>が見られる。

しかし、本研究のように地形CGを利用し、絵画(謙斎の真景山水画)と実景(ソウルの都市景観)との関係の分析を通じて、眺望行為の意味を考察したものはない。

## 1-3 研究の方法及び対象

本研究が対象とする山水画は、現時点で明らかにされている謙斎の総目録のうち、①実景を画題にした真景山水画であること、②描画範囲としてはソウル特別市とし、③描画対象が遠景の山になっていること、という条件を設定した。なお、この 21 点は文献によっておよその描画地が判明しているものである。(表 1)

表 1 研究の対象

| 番号 | タイトル | 番号 | タイトル | 番号 | タイトル |
|----|------|----|------|----|------|
| 1  | 翠微台  | 8  | 錦成平沙 | 15 | 開花寺  |
| 2  | 広津   | 9  | 楊花喚渡 | 16 | 仁王霽色 |
| 3  | 松坡津  | 10 | 杏湖観漁 | 17 | 壯洞春色 |
| 4  | 狎鷗亭  | 11 | 宗海聴潮 | 18 | 銅雀津  |
| 5  | 木覓朝暾 | 12 | 小岳候月 | 19 | 仙遊峰  |
| 6  | 鞍峴夕烽 | 13 | 隠岩東麗 | 20 | 木覓山  |
| 7  | 孔岩層塔 | 14 | 長安烟雨 | 21 | 三勝眺望 |

## II. 分析対象の位置づけ

## 2-1 謙斎鄭敬と真景山水

## 2-1-1 謙斎鄭敬(1676年~1759年)

鄭謙斎の名前は「敬」で、字は「元伯」、「謙斎」は齋名である。その他「蘭谷」という別号がある。

謙斎は真景山水という朝鮮固有の絵画様式を創案した人物である。彼は韓国国土の美しさをより意識的に描き、実景を基づいて画に表現した韓国歴史上の最も偉大な画家である。

## 2-1-2 謙斎鄭敬の真景山水

## 1) 真景山水以前の朝鮮の山水画風について

朝鮮初・中期の山水画の傾向は、中国的様式を恋々として実景そのものに向かわずにいた。後期に入って謙斎によって、実景を重視する考え方が定着したのである。

つまり、謙斎とそれ以後の真景山水画は山水画の理想郷的与件を中国の画論や風景にとまらぬ、朝鮮の山川で直接に探しだすようになる<sup>\*</sup>。

2) 真景山水の思想的背景について

①朝鮮性理学思想: 中国の朱子性理学を完璧に理解した上で、朝鮮の事情に合わせ、朝鮮固有の思想体系を確立した学問である。自国のものに自覚して、絵画部門でも民族的形式が含まれている真景山水が要求されたのである。

②実学思想: 当時、国政から除かれていた若い勢力が成長し、理想的な学問だけを重視した現実を批判し、現実的で実際のものに関心を持つ思想である。朝鮮後期の絵画思想は事実主義を基にして、事実描写が目立つようになった。

2-2 ソウルの立地と地形的特徴

2-2-1 ソウルの風水理論における立地

韓国では伝統的に風水地理論説を重視、周辺の山や河川の形勢や方位が重視された<sup>ii</sup>。その場所によって、人や子孫達の吉凶禍福が左右されると信じていたためである。そして、象徴するものとして吉をむかえ、凶を排することを各方位に対して、神獣を対応させていた(表2)。

表2 ソウル風水理論における神獣の対応

|     | 北   | 南   | 東   | 西   |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 内四山 | 北岳山 | 南山  | 駱駝山 | 仁旺山 |
| 神獣  | 玄武  | 朱雀  | 白虎  | 青龍  |
| 外四山 | 北漢山 | 冠岳山 | 竜馬山 | 徳陽山 |

2-2-2 ソウルの地形的特徴

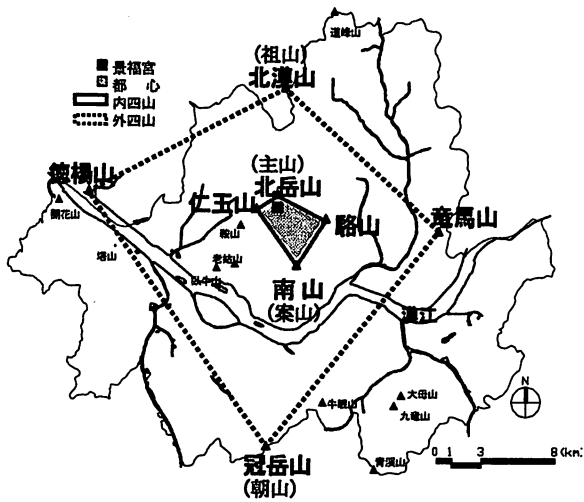


図1 ソウルの地形的特徴

ソウルは、北側に北岳山、東側に駱駝山、南側に南山、西側に仁旺山と四方をまず、内四山といわれる山々に、さらに、外側に北は北漢山、西は徳陽山、南は冠岳山、東は竜馬山といわゆる外四山があって、二重の圍繞構図を成している<sup>xii</sup>(図1)。

2-3 眺望上の要素を謙齋絵画よりもとめる意味

1. 謙齋による描画対象は韓国の人々が中国文化の流れをくむ様式的な風景観賞からはじめて脱却し、自らの目で韓国国土の実景を眺めるようとする出発点となったという点で、他と一線を画すのである。

この意味で謙齋が描いたソウルの風景はソウル眺望の原点と言うことができ、ソウル眺望の保全や創造においてまずはこの表象に立ち戻る意義は大きいと考える。

2. 本研究は、第2節で述べた風水理論上重要な山岳と謙齋絵画に現れる山岳との関係を見ることで、ソウル固有の眺望的価値に迫ることができるのではないかと考えている。

Ⅲ. 山岳眺望の観点からみた謙齋絵画の特質

3-1 謙齋絵画の描画地点及び描画対象(山岳)の特定

3-1-1 描画地点特定

1) 分析のねらい

本章では、大まかに確定された文献により描画地点と地形CGを用い、謙齋の描画地点と描画対象を特定する。

2) 分析方法

文献レベルでは描画地点は大まかな位置がわかっているだけである。一点として特定するために、次のような手順に従って分析を行う。①描かれた構図と絵画の題名、文献の図版解説を参考に、②地形図上の大まかな描画地点範囲を特定する、③同定された範囲内に視点を定め地形CGを作成、④絵画と地形CGとが、最も類似する位置を描画地点として特定する(図2)

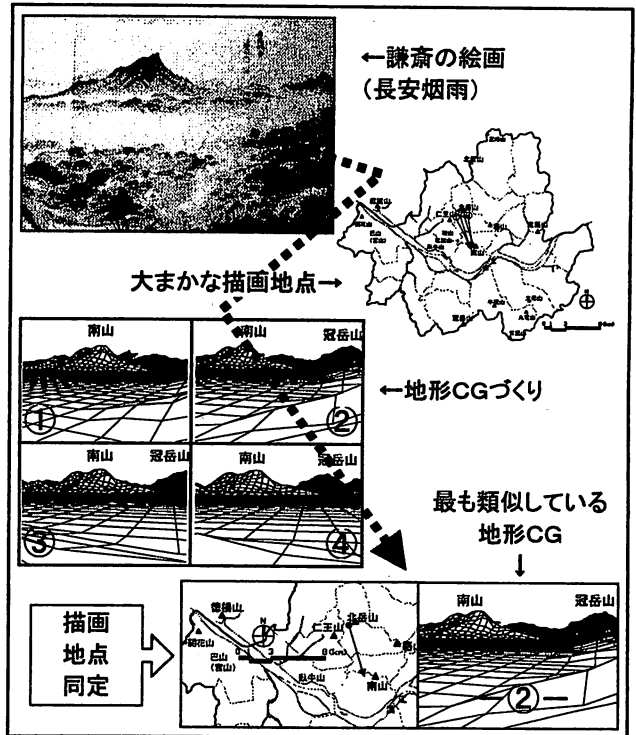


図2 描画地点同定の手順

3) まとめ

謙齋の描画地点は、図番号2, 3, 4, 18を除けば、①北岳山麓の北方面と、②巴山の西方面の範囲におさまっているのがわかる。(図3)

3-1-2 描画対象(山岳)の頻度分析

描画対象としては南山の出現頻度が62%で一番多かった。

(図4)

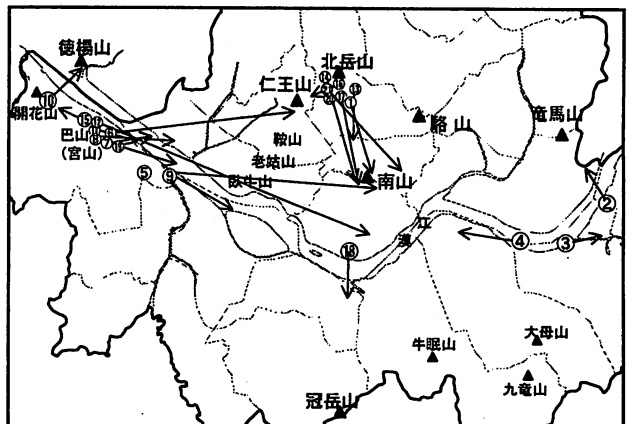


図3 特定された描画地点の結果

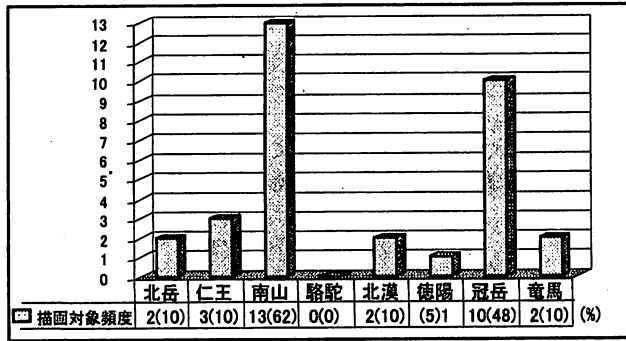


図 4 描画対象の頻度(グラフ)

3-2 謙斎絵画の描画地点及び描画対象の特徴

3-2-1 南山の二つの峰の見え方(形姿論的分析)

1) 分析のねらい

謙斎のソウルを対象にした絵画の中でも描画頻度が大きい南山について、謙斎の描画地点の特色を形姿論的に分析する。南山はソウルを中心に位置し、二つの峰を有する地形的特徴がある。また、昔から「蚕豆峰」という山名で呼ばれ、その形姿が蚕の生き物としての律動感が感じられる姿であるとされてきた。そこで、南山の形姿の特徴に関わりがあるとみられ、このことと謙斎絵画との関連性を明らかにする

2) 分析方法

①南山を中心に、反時計回りに45°ずつ線を引き、そのそれぞれに番号を付す。南山から5km離れた放斜線上に比較視点をとり、地形CGを作る(図5)。

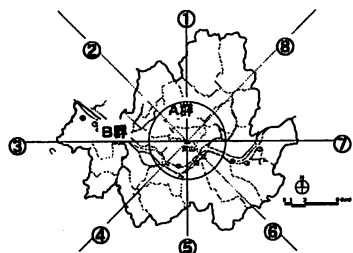


図 5 代表視点A・Bと比較視点①~⑧

②描画点が集中している2ヶ所を代表視点として位置づけ、北側はA群、西側はB群とし、南山山頂から5km地点で地形CGを作り(図6)、③南山の形姿の相違などを検討する

※代表視点A群と代表視点B群の特定

代表視点A群は、①特定された各描画地点の座標を用い、平均を座標とする。その地点の標高を測って、最終的に代表視点A群とする(x, y, z=198100, 453900, 100)

代表視点B群は、実際「小岳楼」という、楼がある地点を代表視点B群とする(x, y, z=185850, 452450, 51)

-ちなみに、地形CGのデータはソウル1/5000の地形図をもち、AutoCADで登高線25mごとを入力したものに、LandCADDでグリッド100mのメッシュファイルを作ったものである。

3) 分析結果

①南山の二つの峰の見え方に関する分析結果

ア) 代表視点Aは比較視点①と②の間、代表視点Bは比較視点②と③の間に位置している

イ) 比較視点①③⑤⑦では南山が双峰の形姿を呈する。

ウ) 比較視点②と⑥では南山が単峰の形姿を呈する。

②南山が蚕の形姿を呈することに関する分析

ア) 代表視点AとBは南山の山頂が前方に出ていて、蚕の生き物としての律動感が感じることができ、蚕に類似した形姿をしている。つまり、蚕の頭部を強調した「蚕頭」の形姿を呈していると言える。

イ) 比較視点④⑧は双峰の両峰がほぼ同じ大きさで見える。蚕の生き物としての律動感や運動感などの感じはしにくい。

③まとめ

ア) 代表視点A(B)は比較視点①⑥(③⑦)と共に双峰であり、右(左)の方に山頂が出ている形姿上の特性を有する。

イ) 謙斎の描画地点は、2つの峰をもつ南山の形姿の特徴を実際に視認できる場所であるということから言える。ただし、そのような特徴は、比較視点①③⑤⑦にも求めることができるため、描画点の選定の理由は、南山の形姿だけでなく、それ以外の観点にも求められなければならない。それについては、3-2-2、3-3において考察する。

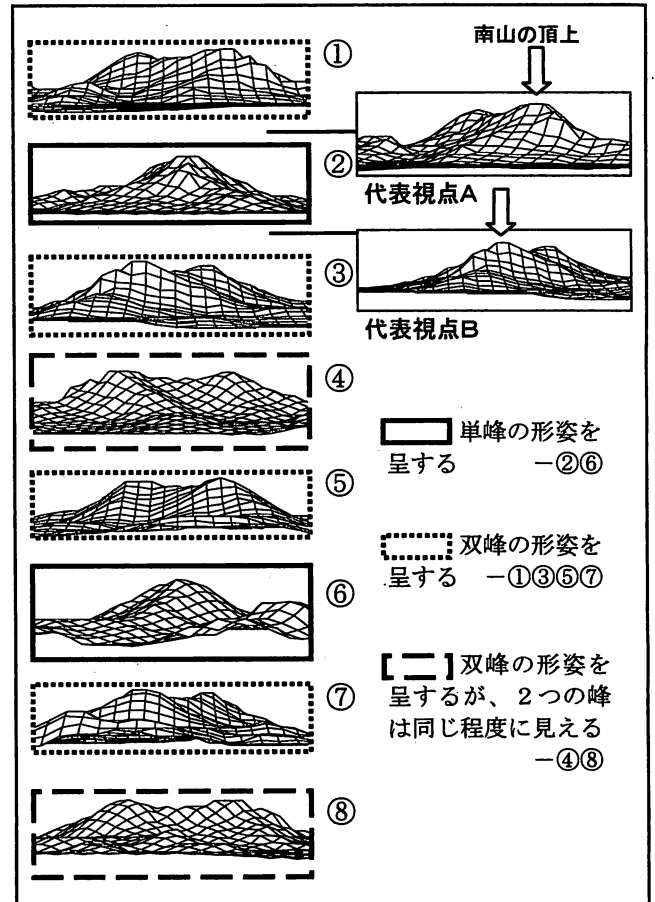


図 6 代表視点A・Bと比較視点①~⑧

3-2-2 山岳の位置関係(構図論的分析)

3-2-2.1 代表視点A群からみた南山-冠岳山との位置関係

1) 分析のねらい

代表視点Aから南山を主対象として描いている絵画は、ほとんど南山とともに冠岳山と一緒に描いている、ということから両山の位置関係に何らかの特徴があるのに着目して、構図論的な観点から分析を行う。

2) 分析方法

代表視点Aの北側の方から地形CGを作り、南山と冠岳山が同じアングル(静視野角60°とする)に入る範囲を探していく。(図7)

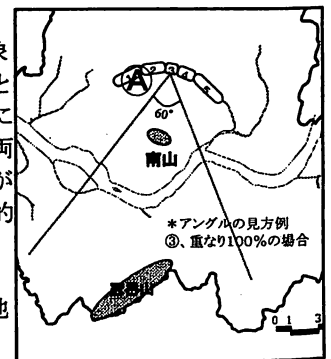


図 7 代表視点Aと南山-冠岳山が見える比較視点の位置

3)分析結果

①南山と冠岳山の重なりに関する分析結果 (図8)

ア) 重なり 100%—南山に隠されて冠岳山が見えないところ：③、イ) 重なり 0%・10~90%—南山と冠岳山と一緒に眺望のできる場所：①②④⑤、ウ) (イ)の中で、重なっているところ (重なり10~90%)：②④、完全分離しているところ (重なり0%)：①⑤

②まとめ

比較視点④⑤からは、冠岳山が遠景となっていて、前景にある南山のボリュームに比べて、微小に見える。それに対して、比較視点①②からは、比較視点④⑤の方より、連峰である冠岳山の存在感がより明確に見える。代表視点Aは、比較視点①と②のところにある。

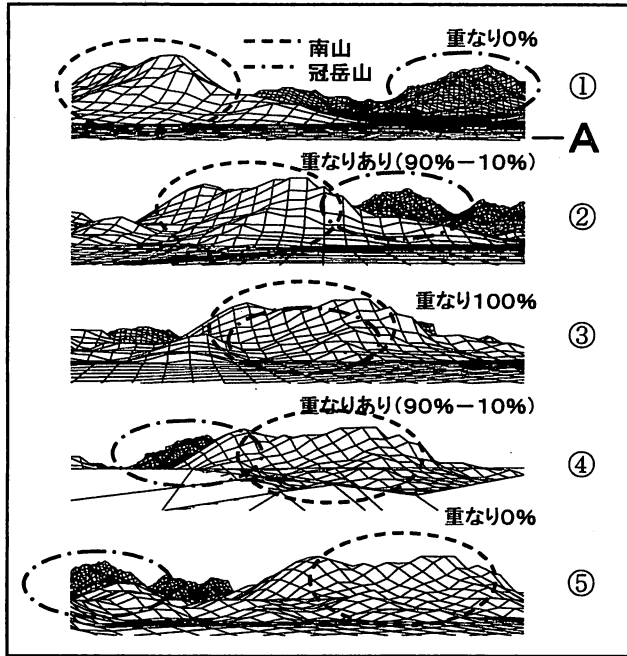


図8 南山と冠岳山の位置関係

3-3 本章のまとめ

表3 代表視点A群とB群の特徴

| 特徴   | 代表視点A群                        | 代表視点B群                 | 備考          |
|------|-------------------------------|------------------------|-------------|
| 形姿論的 | 南山が双峰に見える。山頂が右の方に出ている         | 南山が双峰に見える。山頂が左の方に出ている  | 蚕頭の形姿を有している |
| 構図論的 | 南山と冠岳山の位置関係から冠岳山の存在感が明確に感じられる | 北の北漢山から南の冠岳山までの眺望範囲が広い |             |

IV. 謙斎絵画と風水理論との関連

4-1 本節のねらい

上記の分析より、謙斎の描画地点と描画対象の特徴は、韓国の伝統的風水理論と何らかの関係があると考えられ、風水理論における眺望行為が行ったのではないかと、との仮説の基に考察する。

4-2 代表視点A群・B群と風水理論上要素との関連

表4 村落の眺望特性とソウル市の眺望特性比較

| 村落 |            | ソウル市  |               |
|----|------------|-------|---------------|
| 宗家 | 亭          | 代表視点A | 代表視点B         |
| 舎郎 | 亭、         | 視点    | 北岳山麓          |
| 案山 | 主山、局の外、宗家等 | 視対象   | 小岳楼           |
|    |            |       | 案山(南山)、朝山(冠岳) |
|    |            |       | 祖山、主山、案山      |

4-3 まとめ

- 1) 代表視点Aは「宗家」の眺望特性と類似している。
- 2) 代表視点Bは「亭」の眺望特性と類似している。
- 3) 謙斎の真景山水は個人的な好みのみならず、韓国の伝統的な風水思想と何らかの関連もある、ということから、社会的にその当時の全ての人々が共感できる眺望行為として、描画地点及び描画対象を選んで画を描いたことが明らかになった。

4-4 本章のまとめ

謙斎は単なる個人の好みのみならず、様々な観点からソウルの景観を眺めていたことが明らかになった。

V. 結論

謙斎の絵画を通じて描画地点と描画対象の特徴を分析した結果、以下の点が明らかになった。

1. 謙斎が選んだ描画地点はソウルの北側と西側に集中されていること、描画対象は南山と冠岳山が頻度が多かったことが明らかになった。
2. 代表視点AとBは南山眺望時、前方の峰が大きく見られ、南山の律動感のある具体的な体験ができる場所である。
3. 南山と冠岳山の位置関係に対し、代表視点Aでは冠岳山の存在感がより具体的に感じられる場所であり、代表視点Bはソウルの北から南までの山々が眺められる場所である。
4. 謙斎絵画の描画地点及び描画対象の特徴は、韓国の伝統的な眺望行為と関連があることが明らかになった。

3-2-2. 2 代表視点Bにおける山岳の位置関係

1)分析のねらいと方法

①図9-Iに示すように、平面図において、代表視点Bから南山を中心に、北の北漢山、南の冠岳山までは、ほぼ同じ角度におさまっている。

②代表視点Bを視点とし、ソウル全面積に対象にして可視・不可視領域分析を行う。

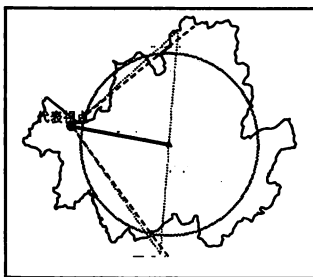


図9-I 代表視点B群における山岳の眺望範囲

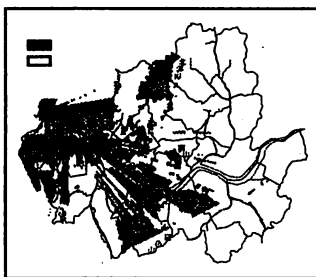


図9-II 代表視点B群からの可視・不可視領域

2)分析結果

代表視点Bは、ソウルの南北にかけて、北漢山と冠岳山を含む眺望ができ、眺望範囲が非常に広いことがわかった。(図9-II)

i 堀口忠彦 (1976) 景観の構図、技報堂  
 ii 新海・堀・白井 (1992) 「日本名山図会」にみる谷文晁の名山観、造園雑誌 55 (5)、pp49~59、造園学会  
 iii 横山・斎藤 (1997) 山岳の形姿に関する一考察、都市計画論文集 (32)、pp343~348、都市計画学会  
 iv 横山・斎藤 (1999) 富士山の風景の多様性と表像との関連について、都市計画論文集 (34)、pp403~408、都市計画学会  
 v 鄭・斎藤 (1999) 韓国の伝統的な村落における眺望について、一般研究論文 (221) p74、都市計画学会  
 vi 朴京子 (1991) 絵画の中の造景、環境と造形 (23) pp98~103、韓国造景学会  
 vii 崔紀秀 (1994) ソウルの景と曲、ソウル学研究所  
 viii 崔紀秀 (1989) 曲と景における韓国伝統景観構造の解釈に関する研究、漢陽大学校博士論文  
 ix 林義雄 (1994) 朝鮮時代ソウル樓亭の造景特性に関する研究、ソウル市立大学校碩士學位論文  
 x 林斗彬 (1999) 韓国美術史 101 場面、ガラム企画  
 xi 崔昌祥 (1984) 韓国の風水思想、民音社  
 xii 李惠銀外4人 (1994) ソウルの景観変遷、ソウル学研究所